母（松口月城）

非行の　少年　囹圄に　泣く
無限の　悔恨　思い　窮らんと　欲す

短歌　**ふるさとの栗も胡桃も熟れたれば**
お前を思うと母の文来る

噫　吾　過まてり　吾　過まてり
終夜　眠らず　独房の　中

短歌　**呼びたくも呼ぶことならぬガラス戸に**
息吹きかけて母と書くなり

頭を　上げては　母を　思い　枕に　伏しても　母
慈顔　仏の　如く　我が　瞳に　浮かぶ

短歌　**かくまでも嘆き給いぬ吾ゆえに**
日毎増え行く母の白髪

海岳の　恩愛　今　始めて　識る
一輪の　寒月　獄窓を　照らす

解説　獄中の少年達が母への愛を詠った詩。詩中の短歌は少年達が作った詩です。

語釈　※非行＝社会の規則や規範・道徳に反するすべての行為。
※囹圄＝獄舎。※無限＝限りのないこと。※悔恨＝あやまちを後悔し残念がること。※慈顔＝慈悲深い顔。慈愛にみちたやさしい顔つき。
※海岳＝恩恵などの深大なことのたとえ。※恩愛＝めぐみいつくしむ心。情愛。※寒月＝寒い夜に光の冷たく冴えわたった月。

通釈　社会的な罪を犯した少年たちは獄舎に収監される。無限の後悔が湧いてくる。ああ、自分は何と言うことをしてしまったのか、一晩、全く眠りにつかず独房で過ごした。上を向いても母のことを思い、枕元に伏しても母のことを思い、母の優しい姿が自分の瞳に浮かんでくる。今までの母の恩愛を初めて感じた。獄舎の窓を見ると、寒々しい月の光が照らしていた。母を泣かすことはもう止めようと思った。